

聖書：マルコの福音書 3：7～19

説教題：十二使徒の任命

日時：2025 年 7 月 6 日（朝拝）

イエス様は今日の箇所です。弟子たちとともに湖の方に退かれました。これは直前の 6 節のパリサイ人たちの反応と関係がありそうです。平行記事であるマタイの福音書 12 章 14～15 節を見ると、パリサイ人たちが「どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた」と記された後、「イエスはそれを知って、そこを立ち去られた」とあります。今日の箇所と同じです。対決するのに時があり、退くのに時があります。まだこの時は敵対者たちと最終的な対決をする時ではありません。そこでイエス様は弟子たちとともに一旦退くという行動を取られたようです。

しかし人々は大勢ついて来ました。7～8 節に色々な地名が記されています。イエス様はこの時、ガリラヤ湖におられました。とするとユダヤ、エルサレム、イドマヤとは南の地方になります。ヨルダンの川向こうは東側です。そしてツロとシドンのあたりとは北になります。西はすぐ地中海ですから書いていないのでしょう。非常に大勢の人々がみもとにやって来ました。イエス様は危険を避けるため、弟子たちに小舟を用意させるほどでした。人々はどのような目的でイエス様のところに押し寄せて来たのでしょうか。10 節から分かるのは、癒やしのためです。病気を治してもらいたくて人々はイエス様のみもとに押し寄せました。イエス様の第一の関心は 1 章 38 節で見ましたように福音の宣教です。残念ながら人々の関心はそちらにはありませんでした。しかしイエス様は憐みをもって癒やしのわざを行われました。またそこでは汚れた霊どもがイエス様を見るたびに御前にひれ伏して「あなたは神の子です」と叫んだとあります。人々はまだ誰もイエス様をそのようには見ていないのに悪霊たちは分かっています。ここに皮肉があるわけです。しかしイエス様はご自分のことを知らせないよう、彼らを厳しく戒められました。イエス様は悪霊たちによってご自分のことが宣べ伝えられることを良しとはされませんでした。悪霊たちは確かに人間たちより見えています。しかし彼らの告白は信仰の現れではありません。彼らはただ恐れて叫んでいるだけです。ヤコブの手紙 2 章 19 節：「あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。」 そのような正しくないあり方に人々が倣うことがないように。むしろイエス様は人々が自分の目でイエス様を良く見て、特に十字架と復活のみわざを通して、正しい信仰を持つことを求められた

のです。

さてこのような混沌とした状況でイエス様が十二使徒を任命された記事が続きます。13 節にイエス様は山に登り、「ご自分が望む者たちを呼び寄せられ」とあります。前にペテロを初めとする四人の漁師たちがイエス様に弟子として召された記事を読んだ時に触れましたが、注目しておくべき点はイエス様が望む者たちを召されたということです。当時のラビはそうでありませんでした。当時は生徒がラビを選びました。生徒が先生を選びました。しかし聖書ではイエス様が主権を持って人を召します。人間からでなく、神から始まるのです。

そしてイエス様は十二人を任命しました。これは明らかに旧約のイスラエル十二部族を思い起こさせます。つまりイエス様は旧約と関係なくご自身の働きを進められたのではないということです。むしろ旧約に基づき、旧約のわざの成就として、その完成として、ご自身の働きを位置付けておられます。ですから旧約と新約は一本のものとして見るべきことをここからも教えられます。

イエス様はその十二人を「使徒」と呼ばれました。「使徒」とは「遣わされた者」という意味です。イエス様は彼らを遣わすため、召しました。しかしそのためにまず「彼らをご自分のそばに置こうと」されたとあります。この十二人はまずイエス様とともに過ごすのです。イエス様とともに生活し、イエス様をいつもそばで見、イエス様と交わり、イエス様から学ぶのです。これがこの後のすべての基礎です。これを経て彼らは宣教へと遣わされます。この時はまだそこまで行きません。イエス様が弟子たちを遣わすのは6章7節からです。6章7節に「また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて」とあります。しかしそれはまだ最初の始まりです。本格的にはイエス様の昇天後、イエス様が地上を去った後も、神の国を宣教する働きが継続できるようにイエス様は彼らを選ばれました。また「霊を追い出す権威を持たせるため」ともあります。これは神の国が地に到来しているしるしです。これは使徒としての働きを遂行するためのものであり、彼らに特有のものです。

こう述べられた後、16 節以降に十二使徒の名簿が載っています。この名簿からどんなことが言えるのでしょうか。三つのことが言えるかと思います。一つ目は、彼らは決して立派な人たちではなかったということです。彼らはむしろ普通の人であり、多く

の弱さを持つ人々だったということです。筆頭者としてペテロの名が記され、次にヤコブとヨハネの名が記されます。この 3 人は十二弟子の中のコアとなる 3 人であり、彼らは重要な場面でイエス様に特別に同行を許された内輪の弟子たちでした。この 3 人は以前見た通り、みな漁師でした。メシアなる方がこれから全世界に及ぶ働きを始めようとする際、果たしてこのような人たちを選ぶでしょうか。都会のエルサレムの人々から見たら話にもならない田舎の人たちです。イエス様はそういう人々をご自身の使徒としてお選びになりました。

まずシモンには「岩」という意味のペテロという名をつけました。彼は果たして岩のような人でしょうか。むしろ私たちが聖書に見るのは熱血漢ではあるものの、おっちょこちょいで、すぐ失敗する人というものです。彼はイエス様から受難の予告を聞くと、イエス様をわきへ連れて行って諫め、イエス様から「下がれ、サタン！」と言われる人です。そして何と言っても、死んでもあなたを見捨てませんと約束しつつ、イエス様を三度知らないと言った人です。岩という名とは似ても似つかない人です。しかしその彼を岩のような者にするという意味でイエス様はこのように名づけられたのでしょうか。

次のゼベダイの子ヤコブとヨハネにはボアネルゲ、すなわち雷の子という名をつけました。彼らは後に他の弟子たちを差し置いて自分たちだけが栄光の座でイエス様の右と左に座らせてもらうことを願い出ます。そのため、イエス様から「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていない」と言われます。またルカの福音書 9 章 54 節を見ると、イエス様を受け入れないサマリヤ人を見て、「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言います。まさに雷の子と呼ばれるような激しい気性を彼らは持っていたことを伺わせます。この福音書にこのあと記されるのは、このようなイエス様を全く理解していない彼らの姿です。彼らは 4 章 13 節でイエス様から「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるのでしょうか」と言われ、4 章 40 節で「まだ信仰がないのですか」と言われます。7 章 18 節では「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか」と言われ、8 章 17 節と 21 節では「まだ分からないのですか、悟らないのですか」と言われます。イエス様の地上の生涯の間中、ずっとそうです。そういう人たちをイエス様は選ばれました。そんな彼らをそばに置いて訓練して行かれるのです。

この名簿に見る二つ目の特徴は無名の人が多く含まれていることです。先ほど3人目まで見ましたが、それ以降の一人一人について私たちはどれだけ知っているでしょう。4人目のアンデレはペテロの兄弟でイエス様にペテロを紹介した人です。次のピリポは五千人の給食の出来事においてパンを買うために必要なお金を計算し、それでも足りませんと否定的な結論を出す人。マタイは少し前に見た取税人レビです。トマスはイエス様の復活を信じなかった人。以上のことはかろうじて知ることができますが、それ以上のことはほとんど分かりません。その他のバルトロマイ、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモンについて私たちは何を知っているのでしょうか。ここから思うことは私たちが良く知らない無名の働き人は多くいるということです。それは私たちが知らないだけで、彼らは何もしなかったわけではないでしょう。ローマ人への手紙16章にも私たちの知らない働き人の名前が沢山出て来ます。そこでその人々は立派な働きをした人たちとして称賛されています。教会は、また神の国の働きは、このような私たちには知られていない多くの働き手によって実は支えられているということを思われます。

そして三つ目に注目するのは12番目に出て来るイスカリオテのユダです。「このユダがイエスを裏切ったのである」という言葉で十二使徒の名簿が閉じられています。ここを読む時にいつも心に重く引っかかる言葉です。ちょうど今イエス様への攻撃が本格化し始めたという記事を読んでいます。攻撃は外側からばかりでなく、内側にもあったと示されています。ここを読む時、イエス様に従うグループの中に自分はいるから大丈夫だということにはならないと思わされます。ユダヤ一般信者ではなく、十二使徒として選ばれた者です。ですから牧師、長老、執事だからと言って安心できない。ユダが十二人に含まれていることで一体これからどうなるのだろうと読む私たちは緊張感を覚えさせられるわけです。そして私は彼のようなことはないだろうかと探られるのです。またユダがこのように十二使徒に含まれていることは教会の理解に大きな影響を与えます。それはイエス様が直々に集め、訓練した使徒たちの交わりさえユートピアではないということです。地上の教会は理想状態には達しないのです。いわゆる毒麦はいつも混じっているのです。しかしこのような十二使徒の中に裏切者が混じっているというキリスト教最大とも言えるスキャンダルを逆に用いて神の救いの約束は実現されて行くということも聖書は語っています。ユダがイエス様を裏切ったその日、イエス様は新しい契約を確立されます。イエス様はその日に聖餐式を制定し、新しい契約の実現を宣言されました。ですから教会の中でどんなにショッ

キングなことが起こっても、なおも教会には希望があるということをこれは示しています。私たち人間の思いとしてガッカリしたり、残念に思うことがあっても、神の計画は変わらない。むしろそのことさえ用いて進展します。神はすべてのことを支配しておられ、私たちの目につまずきでしかないことさえも逆に用いて最善の御心を達成されるのです。

今日の箇所は私たちにどう当てはめられるでしょうか。今日、使徒と呼ばれる人たちはいません。使徒とはイエス様を直接見た人であり、またイエス様から直接任命された人です。そのような人は今日いません。しかし今日の箇所ですら語られた原則は、今日も主がご自身の働きのために召し、任命する一人一人に当てはまると思います。牧師、長老、執事等の教会役員もそうです。あるいは CS 教師やその他の奉仕に当たる人もそうです。あるいは奉仕の名前はついていなくても私たち一人一人は何らかの役割を果たすように、主から賜物と使命とをいただいています。その働きに召された私たちを見るなら、私たちも普通の人間であり、弱い人間であり、霊的に鈍い者たちです。この時の十二人と同じです。また一緒に働く者たちの間にはイスカリオテのユダに相当する人が混じっているかもしれません。教会は最後までそういう集まりであるかもしれません。しかしそのような弱い私たち、欠陥の多い私たちがイエス様は用いて働いてくださるということを今日の箇所は語っているのではないのでしょうか。この世でエリートと呼ばれる人たちから見れば見下されて当然のような者たちを主は用いて、ご自身の働きを推し進めてくださるということを今日の箇所は語っているのではないのでしょうか。そのために大切なことはまずイエス様のみそば近くにあることです。主とともに過ごす者となることです。主と同じ時間を過ごし、主と交わり、主ご自身から学ぶ者となることです。それを経ながら主は私たちに働きへと遣わしてください。

最後に一か所参照したいのですが、使徒の働き 4 章 13 節で、イエス様が天に昇った後の使徒たちについてこう書かれています。「彼らはペテロとヨハネの大胆さを見、また二人が無学な普通の人であるのを知って驚いた。また、二人がイエスとともにいたのだということも分かってきた。」 ペテロとヨハネが捕らえられた翌日、ユダヤの最高法院で弁明した時のことです。ペテロとヨハネは無学な普通の人とされています。ところが彼らが大胆に証しする姿に接してユダヤ人の指導者たちは驚いてしまいます。そして興味深いことは、彼らはペテロとヨハネを見て「二人がイエスとともに

いたのだということも分かってきた」と書かれていることです。ユダヤ人の指導者たちはイエス様を邪魔に思っ手をかけて殺しましたが、この二人を見ていると、そのイエスとこの二人がともにいたのだということが分かって来たというのです。つまりイエス様を彷彿とさせる姿がそこにあったということです。イエス様を強く感じさせるものがそこにあったのです。これはイエス様がご自分のそばに彼らを置いて養育訓練した成果と言えます。彼らはイエス様のみそばで歩んだ者たちとして、イエス様を映し出すかのように、イエス様に強められて大胆に証しできたのです。

私たちも同じです。今日も聖書を通して、またイエス様が遣わした御霊を通して、私たちがイエス様のみそば近くにいるということは可能です。私自身は弱くても、そんな私をそばに置き、ご自身を親しく分かち合ってくださいる主、またあわれみをもって私たちを赦し、聖め、造り変えてくださる主を知る時、私たちは語るべき言葉を持つのです。私たちとともにおられる素晴らしいお方を宣べ伝えるように導かれるのです。こんな私をも立たせてくださるあわれみに満ちた主を証しすることができるのです。イエス様は遣わす前に、まず私たちをご自分のそばに置こうとしておられます。その招きをいただいて私たちもイエス様のみそば近くにある者たちとされたいと思います。御言葉と祈りと礼拝を通してイエス様のみそばにあり、イエス様ご自身から学び、親しく養われる者たちでありたいと思います。そして主によって私たちに与えられている働きへと派遣されて、その召しにお答えし、神の国拡大の一翼を担う主の弟子としての光栄な歩みへと導かれて行きたいと思います。